

社会貢献活動が与える人材育成

は せ
長谷 進

●電力総連・組織局長

私の所属する電力総連では、「電力総連ふれあいプロジェクト」の一環として「海外での植林ボランティアや現地での交流を通じて、地球規模で進む環境問題に対する意識高揚を図るとともに、人間の持つ『優しさ』『思いやり』という感性を再認識する。また次代のユニオンリーダー、社会貢献活動リーダーの養成を図る。」ことを目的に、公益財団法人オイスカの協力のもと、「ふれあいセミナー」を1995年からフィリピン共和国にて開催し、活動は23年間で21回を数え、植林本数は約38,000本となっている。

植林活動については、実際に先輩方が植えた苗が、23年後には立派な木に成長を遂げ、森として再生されている姿を目の当たりにすることによって、禿山に自分たちが植えた小さな苗が数年後に森の再生に繋がるんだという達成感が得られ、また活動を継続することの大切さ、何かに・誰かに対して貢献する喜びに繋がっている。

そのなかでも現地で一番の経験となるのは、人間の持つ『優しさ』『思いやり』という感性を再認識させられることである。

現地での日程のなかでホームステイとホームビジットを実施しているが、参加者が実際に行ってきた感想を伺うと、「家族の在り方や人との接し方、幸せって本当はなんなのかということについて改めて考えさせられた」といったようなことを皆が口々に語りだすのである。

本当に現地の方々は私たちをもてなそうとテーブルいっぱいの料理と家族全員で迎えてくれ、同じ部屋に大人数が集まり楽しそうに語らっている。私たちにとっては、昭和時代のホームドラマでみる「家族団欒」の姿である。その中で私たちとコミュニケーションをとろうと身振り手振り一生懸命に伝えようとしてくれ、上手く伝わると満面の笑みになり、私たちもそれに引っ張られ笑顔になっていく。帰る頃には、しっかりと打ち解け、「ここはあなたの第二の家だからいつでも帰ってきなさい」と送りだしてくれる。こういったことをどの参加者も受け止め、戻ってくるのである。

私たち日本人はそれなりに裕福な生活を送っているが、モノがあふれ便利であるがゆえ、それぞれが自室に戻り、携帯電話を片手にLINEをはじめとするSNSで繋がるなど、コミュニケーション不足や関係性の希薄さを感じ、「本当の幸せってなに？」と改めて考えさせられるのである。結果、「もっと家族を大事にしていこうと思う」とか「積極的に周りコミュニケーションをとっていきたい」といった意識改革に繋がっている。

私たち労働組合は、人と人との繋がりが基本であり、繋がりが強ければ強いほど大きな力を生み出してくれる。人との繋がりを改めて認識した参加者各位が、感じたことを実践し、今後私たちに変わり労働組合役員として活躍してくれることを期待している。